

不登校の克服とはなにか

「子どもの発達と不登校の会」の活動から

西 伸 之

一、はじめに

県教委が公表した昨年度の学校基本調査で、「学校ざらいのため」五十日以上登校しなかった小・中学校の児童・生徒は、過去最高の一六三五人に達したことが明らかになりました。特に中学校では初めて千人を突破し、全生徒数に占める割合も初めて一%を上回りました。

不登校の原因やその対応策等は、すでに多くのところで分析され研究されていますが、私たちは「親と教

師が手をとりあってこの問題を考え取り組んでいく」活動を通して、多くのことを学んできました。昨年の三月からの約一年半の活動をふりかえり、そのことをまとめてみたいと思います。

二、会の正式名称と目的

私たちが開いている『アーベルの会』は、正式名称を『新潟県子どもの発達と不登校を考える会』といい、昨年三月二十日に発足した「不登校問題を通して子ども

門家による会」です。その目的は、不登校問題を通して、現在の社会や学校・家庭の問題点を明らかにし、その見直しを進めていくと同時に、子どもが行きたくなるような学校・子どもが生き生きと活動できる学校はどうあるべきなのか、そのために親や教師は何をなすべきかを考え、行動していくことです。

昨年度文部省は「登校拒否はどの子にも起こりうるもの」という考えにたった報告を行いましたし、昨年八月二五日には「緊急対策」を発表しました。しかしその中味は、「学校や社会の根本問題から逃げてしまい、(登校拒否を)子どもたち個人の問題にしてしまっている。適応しなければならぬのは子どもではなく、『だれでも行きたくなる』学校の方だ」(山口県精神保健センター)という批判が適切です。

新潟市の教育センターが開設している適応指導教室(ぐみの木教室)も「(不登校生徒の)自立心を養い、集団生活への適応力を高め、早期の学校復帰が出来る」ようにするという考えに立ち、その(学校という)集団の質や問題には触れようとはしていません。

その一方で、「不登校の問題は現在の学校の管理主義的な体制の問題である」と決めつけ、「学校否定」の立場に立って、学校や教師を敵視する民間の団体や専門家もみられます。

私たちはそうした官民の両極端の主張の問題点を批判しながらも、不登校の子どもを持ち悩んでいる父母や教師が、お互いの悩みや苦しみを語りあい、また専門の研究者・医者の方々の力も借りながら、互いに学びあい、情報を交換しあって、この問題に取り組み、希望を持って子どもたちに接していけるような会を新潟にもつくろう(全国的にはそうした団体が数多くあり、大きな成果をあげています)と、この会をスタートさせました。

年会費千円で、九月末現在六七名の会員があり、その内訳は、父母三十名・小中高の先生三十名・その他七名です。新潟市を中心に、県内各地に会員があり、現在月に一回の割合で平日の夜新潟市教組会館で会合を持っています。

※「アーベル」とは

会の名称である「アーベル」というのは、昨年十二月に講演でお招きした横湯園子さんの著書『アーベル指輪のおまじない——登校拒否児とともに生きて』からとったものです。「アーベル」というのはドイツ語で「しかし」「それにもかかわらず」とか「もう一度」「ふたたび」などの意味があるそうです。

三、会の内容

ほぼ月一回開いている会では、不登校生徒と関わった教師のレポートの学習や、子どもが不登校になった経験をお持ちの親の体験を聞いたり、中学時代不登校だった高校生の話や現在不登校真っ最中(?)の子どもの話を聞いたり、近況報告やそれへの質疑・相談活動、親の立場からの学校への質問・願い・意見、教師の立場からの学校の状況報告や親への質問・意見の交流を中心に行っています。

また年に一〜二回、専門の方をお招きしての講演会や親同士・子ども同士の交流を深めるためのレクリエーションや懇親会を行っています。

四、会の意義と成果

○不登校で悩む親が元気になる場

不登校の子どもを持つ多くの親が、「他の子はみんな学校へ行っているのに、なぜ我が子だけが」と一人で悩み苦しんでいます。何とか子どもを学校に行かせようとあせったり、自分の子育てが悪かったのかと落ち込んでいます。そのことがますます子どもを追いつめてしまっています。そんな同じように苦しみ悩んでいる親同士が、悩みを語りあい、すでに不登校の悩み

をのりこえた親の体験や実際に不登校状態の子ども自身の話聞くことで、すごく気持ちになるようです。

○親の思いに教師も共感でき、やさしく元気になる場

本音で話す父母の話に、参加した教師誰もが、その切ない気持ちや苦しみに心を動かされます。学校や教室では仕事の多忙さも手伝ってどうしても目の前にいる子どもたち中心に考えてしまいがちな私たちです。しかし会に参加すると、親の子どもへの思いの深さをしみじみ感じます。親にとって我が子は何よりも大切な存在であるというごく当り前のことを、そしてその大切な子どもたちを私たちは預かっているのだということ、いつのまにか忘れてしまっていることに気づかされます。

○親も教師も自分を見直し、自分が縛られていたものに気づかされる場

私たち大人のおかしさを、不登校の子どもたちは教えてくれます。人間は一人ひとりみんな違うということ、そして誰もがかけがえのない存在であり、異質同等の生き方を親も教師も教えないならならぬのに、いつの間にか世の中の風潮に流され、「一つのものさし」で子どもを計ろうとしたり、その「ものさし」に

子どもを無理やりあてはめようとしたり、あてはまらない子どもを「ダメだ」とか「集団不適応」という決まり文句で切り捨てたり「鍛え直そう」としたりということを、親も私たち教師もいっばいやってきたのではないでしようか。

○学校のおかしさを感じる場

教育を受けることは子どもたちの権利です。そして学ぶことは本来喜びであるはずなのに、はたして今の学校はそうなっているでしようか。

子どもが理解していないのを知りながらも先へ進まなければならない苦しさは、教師なら誰もが経験していることです。わからないまま先へ進められる子どもたちにとっては、苦しいですまされる問題ではありません。やる気を失い、自分に自信が持てなくなり、「オレなんかどうせダメな人間なんだ」という自己否定感だけが残ります。今の学歴偏重社会の中では、「学習面での落ちこぼれ＝人生の落ちこぼれ」感を親も子どもも抱きかねません。

また多くの学校に見られる「管理主義的」な風潮も改善していく必要があると思います。「変形学生服を着てきた場合は着替えに帰らせる」「遅刻した生徒の名前を放送で発表する」「忘れ物調べを一覧表にして教室に張り出す」などの生徒指導がごく当り前のよう

に行われているところが少なくありません。

子どもたちの一見問題にみえる行動の裏に何があるのかということ私たちはもっといいねいに見て、子どもたちの気持ちや心に寄り添った指導をしなければならぬのではないでしようか。

また、学校の中にあると、どうしても「みんな同じ行動をとるように」要求してしまいがちです。運動会の行進や集会時の整列、発言の時の声の大きさ、提出物、遅刻、服装、髪型——、「右向け右」と号令をかければ素直に従う、そうした教師の要求にきちんと応える子はいいい子で、そうでない子は「集団不適応」とか「問題児」と思われがちです。

「みんなと同じであることを要求し、違うものを排除する」管理の強まった学校、その中で子どもも集団も「人と違うことを恐れ、自分を殺してみんなとあわせようとし、違うタイプの友達をいじめという形で排除する」、そんな世界に背を向け、登校を拒否している子どもは、ある意味では正常だと言えるかもしれせん。今必要なことは、いろんな子どもがいるということとを余裕を持って受け入れ、子どもたちの立場にたって、どんな子にとっても居心地のいい楽しい学校をつくることではないでしようか。

そうした学校がなかなかできない原因の一つに、多

忙な現場の状況があります。一人ひとりの子どもに寄り添いたくても、部活指導や研究会、様々な出張等で、本当に現場は忙しいのです。この多忙化を何とかしないと、ゆとりを持って一人ひとりの子どもに接することは不可能です。学習指導要領の早期見直しはもちろん、三五年学級の実現や部活指導の見直しなど、行政への働きかけを強めていく必要があると思います。

○親と教師が手を取り合える場

親も教師も、自分の悩みや考えを本音で話し合うなかで、今まで学校や教師に対して不信感しか持てなかった不登校の親が、学校の様子や文部省の方針・社会の風潮を知り、またそんな中でも子どもを理解しよう・子どもの心に寄り添おうと努力している教師が大勢いるということを知るなかで、学校や教師に対する見方が変わっていききました。また教師も、「親の子育てに問題がある」「家庭環境が問題だ」と不登校の原因を親や家庭だけに求めようとする見方が間違っていることを、そして親も家庭も必死であり、学校や教師批判は、裏をかえせば学校や教師への強い期待なのだということがわかるようになりました。

○不登校は絶望どころか、子どもの発達にとって重要な時期だということを確認できる場

「学校に行かず昼夜逆転した生活」「親への反抗」

「ファミコン漬けの毎日」「人と一切会おうとしない」——一見全くの怠けのように見える（事実怠けているのかもしれない）絶望的に見える不登校の子どもたちの行動。親も教師もあせります。しかし全く展望が見えないそんな状態になっても、子どもを信じ、ゆっくり待てば、必ず子どもは、以前よりもっと大人になって立ち上がるということを、多くの親や教師・不登校の子ども自身の体験で確信することができました。

不登校の中三の女の子は「（不登校を克服するためには）昼夜逆転している乱れた生活をたて直すことが大切」という意見に対して、「夜はみんなが動いていないので安心できる。その中でいろんなことを考えて、がんばろうという気になる。夜働いている人たちだっているのに、昼夜逆転が悪だという見方はおかしい」と異議を述べていました。

私たちから見れば、よくないことだったり無駄だったりすることが、実はその子にとっては大事な意味を持つことを知らされた発言でした。

○不登校問題に関する様々な情報が得られる場

私たちの会でも独自に体制を作り個別の相談活動を行っています。と同時に、不登校問題に関する講演会や集会などの案内、新聞記事や本、相談機関の紹介なども例会時や会員への郵送という形で、随時紹介してい

ます。いろいろなケースがあり、解決のための特効薬などない問題ですので、親や教師が出来るだけいろいろな事例や考えを知り手段を利用できるようにと考えています。

五、会の課題

これまで述べてきたように、約一年半の活動で、多くの成果や前進が見られました。その一方で、会の目的から見てまだ不十分な点や、活動が進む中で新たに生じてきた課題もあります。

○系統的な学習を進めていくこと

この会に参加する親も教師も、いろいろな経験を聞き、また自ら本や講演等で学びながら、不登校問題についての認識を深め、ゆとりを持って子どもに接することが出来るようになってきました。そういう意味でも、学習は非常に大切です。さらに系統的な学習の時間を確保し進めていかねばならないと思います。

○子どもが行きたくなるような学校づくり

会の目的でもある、「子どもが生き生きと活動でき行きたくなる学校づくり」については、前述のようにかなりはっきりしてきたものの、「どうしたらそんな学校・学級にしていけるのか」ということになる、実践はいくつか紹介されているものの、ま

だ不十分な段階です。

○行政への働きかけ

「子どもが行きたくなる学校」にしていくうえで、多くの問題を含んだ学習指導要領の見直しや職場の多忙化の改善等は、教育委員会等の行政機関の努力が不可欠です。不登校加配や不登校問題の研修会の開催、一定の努力は感じますが、教員を増やすとか、学級の定員を減らすとか、部活動の社会体育への移行など、教員がゆとりを持って子どもたちに接することが出来る状況を作りだすことにもっと力を入れてほしいと思います。不登校研修の中味も、「不登校の原因を子どもの生育歴や親（祖父母）の子育て」に求めるものが多く、学校の問題点に目を向け「子どもが行きたくなる学校・学級」にしていく実践や指導はほとんど行われていません。

そのため研修に参加しても、自分は何をすべきなのかつかめないまま、「ゆっくり待てばいいのだ」という部分だけを実践に取り入れ、実際には何もしないという教員も大勢いるようです。精神科医や専門のカウンセラーではないのですから、家庭の中に首をつっこみ、親の子育てを批判したり「指導」することなどとてもできませんし、そんな時間もないというのが正直なところかもしれません。

また、行政は「適応指導教室」を増やすという取り組みをしています。「学校へはいけないうが勉強はしたい」「友達と触れ合いたい」という願いに応え、子どもの居場所を作るという点では、一定評価できるので、それが子どもが行けなくなっている学校の問題点には目を向けず、「子どもを鍛え直して集団適応能力をつける」とか「早期の学校復帰」だけを目的としているなら、大きな問題です。

○県内各地に「アーベルの会」のようなサークルを広げていく

もっともこの会を伝え、広げていきたいと思いますが、また県内各地にも会員がいるのですが、このようなサークルを定期的に開いているところは、水原と豊栄だけにとどまっています。いろいろなところでこのようなサークルが出来、活動し、互いの交流を深めていくことで、不登校で困っている親や教師の力にもなれ、またこの問題についてももっと深めていくことができると思います。

○教員の参加を増やす

不登校問題の広がりの割には先生方の参加が多くありません。学校を変えていけるのは、何といっても教師です。一人でも多くの教師が参加し、学び、考え、てくれることを願って、これからは教員への働きかけ

を続けていきたいと思っています。

○専門家やこの問題に関心を持っている多くの人の参加を

医師や大学の先生・カウンセラーなど、専門の知識を持っている方々や、いろんな分野で活躍している方々の参加によって、より一層勉強になり、展望も見えてきます。そういった意味でも、そういう方々への会への参加を積極的に呼びかけていかなければと考えています。

六、不登校の克服とは

「不登校の克服」と言う際大事なことは、「学校に行かない（行けない）ことの子どもにとつての意味」を考えることだと思っています。不登校の期間を通じてすばらしく成長し、自立の力をつけていった子どもたちが大勢います。「不登校＝悪」ではないのです。ところが大人は「不登校はよくないことだ。早く学校へ行かせよう」と焦ります。それがますます子どもに罪悪感を持たせ、希望を失わせてしまっていることがよくあるのです。「登校拒否状態から脱出するまでには長い時間がかかるのは確かである。親子ともに辛い期間が続くにちがいない。せめてその期間の罪悪感と焦燥感を減らしてあげたい、どうせこもるのなら豊かにこ

もらせてあげたい、豊かにこもれば豊かに脱皮するだろう、現になんと多くの子どもたちが豊かに脱皮して確かな青年期を歩んでいることか、それには自分自身に対して希望を抱き続けることではないだろうか」(横湯園子著『アーベル指輪のおまじない』より)。

そのような「豊かなこもり」をさせてあげ、子どもの自己回復力を信じて希望を持って待つことが出来るかどうかが大切なのではないでしょうか。その結果、自分の人生をより豊かに生きる力が子どもの中に育っていた時こそ、「不登校の克服」ができたといえるのではないのでしょうか。

また、「不登校という出来事を通じて、親や教師が学校や社会の問題点に目を向け、成長し、豊かな心とゆとりを持って子どもに接することができるようになる」、親や教師にとっての不登校の克服とはそういうことではないでしょうか。

七、おわりに——私たちの立場

現在の学校に多くの問題があることは、これまで指摘してきた通りですが、私たちは学校否定の立場には立っていません。子どもの学ぶ権利を保障し、生きる力をつけるうえで公教育は大変重要です。問題は公教育の質の問題です。子どもも多くの親も学校そのものを

を否定しているのではなく、存在さえ脅かされるような学校を否定しているのではないのでしょうか。すべての元凶を学校と教師に求め、それを否定する風潮に対しては、今後も批判していかなければならないと思います。また「学校に行かないこと」「みんなと同じことができないこと」を「子どもの個性だ」として、「学校に行かせよう」「できるようにさせよう」という努力を否定するのも誤りだと思います。「個性」と言うことによって子どもの能力を固定的にとらえ、結果として子どもの可能性を摘み取ってしまうことにつながりかねません。私たちは、「人間は異質同等である」ことを認めあいながら、「子どもは無限の可能性を持っている」という立場に立って、これからも実践を重ねていきたいと考えています。

県内各地はもちろん、同じように頑張っている全国の団体とも協力し交流を深め、学びながら、これからも会を発展させていきたいと思います。

(にし) のぶゆき 新潟市中野小屋中学校